

発達障害幼児に対する水泳指導の検討

- 発達と障害の視点から -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター

子どもは水遊びが大好きである。水は可塑性に富み、非常に魅力的な素材として親しまれている。しかし、泳げるようになるためには、水遊びだけにとどまらず、「指導」が必要になってくる。スイミングスクールの普及に伴い、スイミングスクールで泳ぎを習得する子どもが多くなったと考えられる。泳げるようになるためには「水慣れ（呼吸法の習得や潜ることも含む）」「浮く」「進む」という段階を踏んで、そこから各泳法（クロールや平泳ぎなど）につなげていくが、スイミングスクールでは、この段階が細かく分けられ、進級制で指導を行っていることが多い。また、現在では、水泳は、子どもから大人まで誰もができる「余暇活動」「生涯スポーツ」の1つとして広まっているといえよう。

水泳が一般的になるに従って温水プールが普及したことは、発達障害児に対する水泳指導を行うにあたって、非常に有利に働き、現在までに様々な報告がなされている（光岡他，1983；光岡他，1984；池田，1988；南出，2000；工藤他，2003；横山，2004）。その中には、自閉症児や精神発達遅滞児などの発達障害児を対象とする水泳指導の場合、遊びの要素をふんだんに取り入れ、楽しみながら水に慣れていくことから始めて、その中に技術的なものルールなどを取り込んで指導していく方法が報告されているものや、水泳技能の習得状況を、発達と障害の視点から分析した報告（藤堂他，1993）などがある。藤堂ら（1993）では、水慣れや水中歩行といった技能は、習得要因として水への経験的要素が大きく、知的発達との関係が弱いことがわかり、板キックなどの技能では知的発達との関係が強い、ということが明らかにされている。しかし、水泳技能を習得していく要素と、障害と発達がどのように関連するかについて、具体的に検討された研究はあまり見られない。

以上のような知見から、本研究では、水泳技能を習得していく際の基礎的な要素として「水慣れ」「浮く」「進む」の3点をとらえ、発達障害児がこれらの要素を習得していく過程を分析し、それが障害や発達とどのように関連するかを検討することを目的とした。

それを検討するため、本研究では小集団で水泳指導が行われている知的障害児通園施設に通う5歳児7名を対象とし、民間のスイミングスクールで実施されている水泳指導（以下、「5歳児に対する水泳指導」とする）を毎週1回、約1時間、ビデオカメラで記録し、行動描写法を用いて記述的分析を行った

対象児7名を障害名、及び、療育手帳の判定をもとに、精神発達遅滞群（以下、MR群とする）の中度・1名、MR群の重度・2名、自閉症群（以下、A群とする）の中度・2名、A群の重度・2名の4つに分けて考察した結果、以下のことが示唆された。

水泳技能の習得状況については、「水慣れ」の習得に関しては、水泳指導の経験の有無が関係すると同時に、自閉症児の一部には「過敏性」が原因で水慣れが非常に困難であ

る場合があるということが考えられる。「浮く」ことの習得に関しては、障害種別よりも運動面の発達によって差がでて、さらに「水中で脱力して浮く」ということを経験し、頭の中でイメージすることも必要であると考えられる。「進む」ことの習得に関しては、浮くことが前提となるため運動面での発達も必要になるが、さらに、課題の意味がわかり指導者の指示の意味もわかるような、一定以上の認知面での発達も必要であると考えられる。

また、水泳指導を通して付随的に対人関係や社会性についても発達が見られることも示唆された。具体的には、スイミングが好きな児は行くことを期待し、一方で、顔つげが嫌いな児は「やらなければいけないこと」と折り合いをつけて取り組む力がつく、“プール”という独特の環境が、日常場面では作りにくい「恐怖を乗り越える場面」、「大人に助けを求める場面」を作り出しやすいため、特に自閉症児に見られにくい「人に向かう」、「手を出して助けを求める」という姿が水泳指導では必ず見られる、活動の流れや環境がわかりやすいため、あいさつや片づけ等のマナーも身につく、ということが考えられた。

指導に際しての留意点では、3つの要素の中でも最も基礎となる「水慣れ」を重視する必要がある、その為にも「水遊びと技能習得に向けた指導のバランス」を考えることが大切である、困難な課題に取り組む際には「信頼関係のとれた大人の存在」が重要である、ということが示唆された。また、実際に指導を行う際には、流れを途切れないようにしたり、メリハリをつけて合図を出したりすることが必要であると考えられた。

また、発達に障害がある為、泳げるようになるには長い時間がかかるであろうし、発達に規定されて習得が困難な課題もあるが、「余暇活動」という視点から、「楽しむために泳ぐ」という視点を持って継続していくことが大切であると考えられた。

今後の課題としては、発達障害児が水泳技能を習得していく過程を、障害と発達の視点から継続して見ていき、どのようなプログラム内容や指導方法がより良いのか、という点について、健常児の水泳技能の習得過程とも比較しながら検討していく必要があると思われる。